

奈文研

ニュース

No.39 Dec.2010

NABUNKEN NEWS

CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町四丁目9-1
<http://www.nabunken.go.jp/>

平城京遷都1300年祭、大いに賑わい、成功裏に終了

11月7日をもって、平城宮跡会場における遷都1300年祭は無事終了しました。社団法人平城遷都1300年記念事業協会の発表では、期間中の来場者は、363万人におよび、当初計画を100万人以上も上回ったということです。連日の賑わいは、日頃の静かな宮跡を見慣れているものにとっては信じられないほどのことで、第一次大極殿を見学した人も、来訪者の半数近くを数えたということです。

今回の祭典は、かつて盛大に行われたという1200年祭や1250年祭と比べて大きな違いがあり、平城宮跡の保存史上重要な意味を持ちます。それは棚田嘉十郎や溝辺文四郎など地元の数人の有志から始まった平城宮跡の保存運動の大きな到達点を示すものです。

1200年祭の時も、1250年祭の時も、保存範囲は、宮跡中心部の一部にすぎず、まだ宮跡全体に及んでいませんでした。今日、平城宮跡は東院の張り出し部を含めて全域が特別史跡であり、「古都奈良の文化財」を構成する世界遺産です。そして、その特別史跡の大半は、国営公園にもなりました。また、この間、発掘調査の成果を受けて文化庁が策定した遺跡博物館構想にもとづく整備と復原も着々と進めています。とりわけ、4カ所の実物大復原のうち最後にあたる第一次大極殿が完成し、その完成式典の行われた4月23日から11月7日までの約200日間という長期にわたって平城宮跡会場での祭典が繰り広げられたのです。かつての祭典とはまったく異なる条件でおこなわれた1300年祭です。

幕末の研究から150年、明治の保存運動から100年、この間、民間の有志、地元住民、有識者、国、県、市など政官の関係者、そして発掘と調査研究に携わった諸先輩など、実に多くの人々の努力と思いが今日の平城宮跡を実現させました。平城宮跡には、遺

跡自体の価値に加えて、これらの人々の思いや行動という価値も加わっているのです。1300年祭の成功は、こうした平城宮跡がもつ総合力が評価されたということではないでしょうか。

多数の来訪者ということだけではなく、今回の祭典でもう一つ強調しておきたいことは、市民によって支えられた祭典であったことです。平城宮跡に関していえば、解説ボランティアの活躍を特記しなければならないでしょう。すでに、平城宮跡では、奈良市や奈良文化財研究所がサポートする解説ボランティアが10年以上にわたって活動しているという実績がありました。この人たちを核にした数百人の解説ボランティアが連日来訪者に懇切丁寧な対応をし、平城宮跡の価値を発信し続けたのです。通算30万人、一日平均1500人の人に解説したそうです。こうした市民の活躍こそが、来訪者の数字以上の意味を持ちます。市民の皆さんと、平城宮跡やこの奈良の史跡をはじめとする文化財に誇りをもったことの証ではないでしょうか。このことが、何よりもこの祭典の意義ではないかと思います。

今、誰もが口にするのは、この祭典を一過性に終わらせてはいけない、ということです。事実その通りですが、その分、平城宮跡の保存活用に直接かかわる奈良文化財研究所の責任も重大ではないかとあらためて思います。

(所長 田辺 征夫)



フィナーレを迎えた平城宮跡

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）

4月に開始した朝堂院朝庭の調査は、7月に夏の現場班に引き継がれました。7月までの調査で、朝庭広場一面を3~10cmほどの礫で覆うとともに、排水施設として暗渠を設け、整備していたことが明らかとなりました。7月以降は、藤原宮造営期の遺構を中心に調査を進めてきました。

藤原宮造営に関わる遺構としては、調査区中央や西寄りを、南北に運河が貫流することが確かめられました。過去の調査成果を合わせると、運河の総延長は南北550m以上となります。この運河は宮の造営資材などを運搬したものとされていますが、今回の調査では、その運河から北東方向に支流がのがいでいることがわかりました。このような枝分かれした溝は、2008年度の第153次調査でも確認しており、造営資材を朝堂院の必要な場所に運び込むためのものと考えられます。

さらに運河の東側にあたる調査区の北東部では、沼状遺構を検出しました。今回の調査で、この遺構は南北44m・東西38m以上の非常に大規模なものとなることが判明しました。埋土からは、木材加工の際の削屑と考えられる大量の木屑が出土し、この遺構の周囲で造営資材の加工がおこなわれていたことが推測できます。（都城発掘調査部 若杉智宏）

なお、7月初めの調査工程で「大嘗宮」かとみていた遺構は、調査が平面検出などの精査へと進んで、遺構としては認められないことがわかりました。そこで7月1日の記者発表、および7月3日の現地説明会の発表内容を、11月18日の記者発表で訂正いたしました。（都城発掘調査部長 深澤芳樹）



飛鳥藤原第163次調査区全景(南から)

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第164次）

檜隈寺は、キトラ古墳から約600m北西の丘陵上に位置する寺院です。渡来系氏族の東漢氏の氏寺とされ、その寺跡には現在、東漢氏の祖先とされる阿知使主を祭神とする於美阿志神社が建っています。神社の境内には、今も7世紀後半に造営された講堂・金堂・西門の基壇の一部が残っており、塔跡には平安時代の十三重石塔が建っています。

今回の調査は、キトラ古墳周辺の国営歴史公園の整備にともなうものです。調査区は2カ所にわたり、8月24日に開始しており、調査面積は約750m²です。

今回の調査区は、於美阿志神社境内にある講堂基壇の約50m北に位置します。本来ならば、僧房など寺院の重要な建物を想定できる場所ですが、柱穴列や基壇など明確な建物跡は検出されませんでした。調査区のある場所は、講堂基壇から25mほど低い位置にあることから、後世に大規模な削平をうけていることが考えられます。

ただ、瓦を利用した暗渠が1基、大規模な削平を免れて検出されました。調査区内には、丘陵部西側斜面にかけて北西方向の小さな谷があり込んでおり、その谷頭部に暗渠を作り、谷底に向けて排水していましたと考えられます。使用された瓦は、檜隈寺創建瓦で7世紀後半のものと考えますが、谷の埋土から出土した遺物の年代は、それより後の10世紀前後のものが多く、暗渠が作られた時期を確定するには、さらなる検討が必要です。

また、調査区西側斜面では、奈良時代以降の大規模な整地を確認しました。奈良時代以降の檜隈寺は、平安時代の十三重石塔があるものの、不明な点が依然として多く残されているのが現状です。今回の調査でその一端を知る手がかりを得られればと期待しています。（都城発掘調査部 石田由紀子）



瓦を利用した暗渠(北から)

薬師寺の調査（平城第474・475次調査）

薬師寺では、各所に防災設備を設置するため、昨年度より発掘調査がおこなわれています。

第474次調査では、薬師寺の東面回廊附近から東に向かって、逆L字形の調査区を設定しました。南北トレーンチは長さ約14mで、幅は1m部分と2m部分があります。東西トレーンチは幅2m、長さ36mです。調査期間は8月16日～10月21日でした。

これまでの調査・研究では、調査区の北側に僧房を確認しており、この僧房の南側の状況はわかつていませんでしたが、今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見しました。

池の範囲では、自然木や松ぼっくりの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積がありました。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられます。また、このあたりで利用できる土地を抜けるために、池岸を何度も改修して陸地を増やしたり、池を埋めて東西溝を掘って排水するなど、知恵を絞った様子が窺えます。

池の西岸では幅約2mの瓦溜りを見ましたが、建物に伴うものであるかについてはわかりません。

今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できませんでしたが、回廊の東側からわずか20mほどしかない伽藍中心附近まで池が広がっていたという、かつての姿を垣間見ることができました。



平城第474次調査瓦溜り（東から）

第475次調査は、薬師寺休ケ岡八幡宮の裏手における発掘調査で、10月5日～11月2日まで調査をおこないました。

八幡宮の裏手は竹林ですが、社殿の側に切り通しをもつ南北の小道があります。路面には遺物包含層および地山がすでに露出した部分があり、このため路面の精査から調査を開始しました。調査成果は次のとおりです。

道路を東西に断ち切るかたちで調査をおこなったところ、地山が社殿のある西側に向けて高くなっていることがわかりました。八幡宮の創建は9世紀末のことですが、社殿がやや小高い丘の上を選んでいることが考えられます。

地山は白色シルトないしは橙色砂礫層ですが、道路の東側にもすでに露出しています。しかし、道路部分では社殿側（西側）の高所から約1.3m低いレベルでようやく地山を確認しました。あいにく調査範囲が狭く、全容を明らかにはできませんが、切り通しまたは素掘り溝と考えられます。

なお、このくぼみは、奈良時代前半の土器を含む包含層が幾重にも重なることで埋没しています。したがって、その開削は少なくとも奈良時代以前のこととみられ、八幡宮以前の地形変化を考えるうえで貴重なデータを得ることになりました。

（都城発掘調査部 海野 聰・清野 孝之・森川 実）



平城第475次調査風景（南から）

土の下には何がある？？ 平城宮東方官衙地区の探査

継続的に発掘調査や整備が進む平城宮ですが、寧楽の都を解明し、伝える、という目的に加え、調査、保存の技術の開発や史跡の利活用の実践という課題もあります。そう、ここは実験の場でもあるのです。

発掘以外にも、遺跡の情報を知る方法はいくつかあります。奈良文化財研究所は多様な方法を摸索してきました。今回は、その方法のひとつである、地中レーダーによる遺跡探査について紹介しましょう。

この方法は、アンテナから地中に電磁波を発信し、その反射をとらえる方法です。九州地方や関東地方では、条件が良ければ、柱穴などの存在もとらえることが可能になってきました。しかし、近畿地方の土は、手強いようで、なかなか良好な結果が出せず、未だ日々試行錯誤の連続です。

ここ数年、都城発掘調査部と連携して、探査と発掘調査を連携させる試みをおこなっています。張り巡らせた基準線に沿ってアンテナを引く作業は根気が必要です（図①）。草地、ぬかるみ、まんべんなく歩くと、現在の平城宮は一面の草地ではなく、様々な場所があることを体験することができます。勘弁して欲しいことも度々ですが・・・。

苦労の甲斐あってか、ここで取り上げる調査では良好な成果を得ることができました。ここでは、浅い部分（図③）と、やや深い部分（図④）の成果をお見せします。成果として出力した平面図東側（図②右側にある）には築地で囲まれた区画と門、道路、立ち並ぶ建物の礎石や柱穴、溝、といった遺構が存在しています。これらは部分的な発掘調査でその内容を明らかにすることができました。未調査の西側（図②左側にある）には石敷の広場？、その北側に性格も時期もわからぬ円形の謎の反射がうつっています。

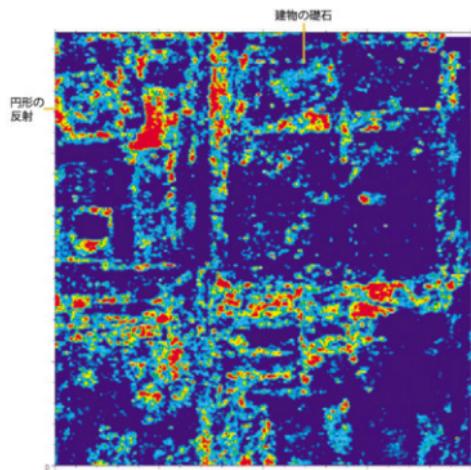
この成果からはまだまだ色々なことがわかりそうです。じっくり見ていただいて、調査員が気付かない遺構の存在や、その性格について想像してみてください。（埋蔵文化財センター 金田 明大）

①探査のために張り巡らせた基準線と地面を遠ざけるための棒にセットした地中レーダー（左下写真）

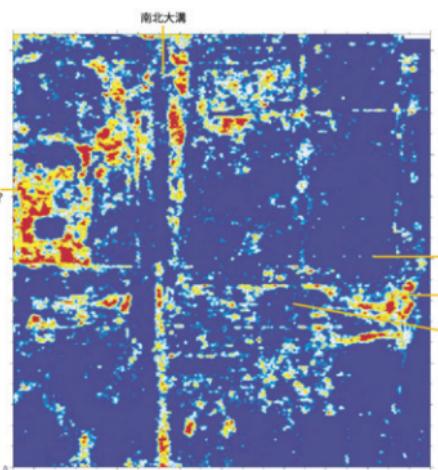




②発掘調査で確認された遺構（平城第466次調査・東方宮衛地区の調査 2010年4月）



③地中レーダーによる探査成果（やや浅い部分）



④地中レーダーによる探査成果（やや深い部分）



平城宮跡資料館 冬期企画展のごあんない 「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」



国土地理院・近畿地方測量部との合同主催でお送りする今回の企画展では、測量と地理の視点から平城京と文化財を読み解きます。

奈良時代の人が使ったものさしや、江戸時代に平城京を研究した北浦定政の測量史料などの貴重な実物や、国土地理院の平城京空中写真などを公開します。また大和の古地図を取り上げ、奈良時代から現代まで続く土地の歴史について触れます。そのほか、測量技術を用いた文化財研究の最前線を紹介するコーナーや、測量機器に触れる体験コーナーもあります。

12月19日（日）には、古代と近代・現代の測量について解説する記念講演会や、同時開催イベントとして社団法人奈良県測量設計業協会による平城宮跡での測量体験も実施しました。

（企画調整部 渡邊 淳子）

会期：2010年11月26日（金）～2011年1月16日（日）
開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）
休館日：月曜・年末年始（月曜が祝日の場合は火曜休館）
お問い合わせ：TEL 0742-30-6752（連携推進課）
URL:<http://www.nabunken.go.jp>



第2回 特別講演会（東京会場）開催

9月25日（土）、東京の有楽町朝日ホールで特別講演会を開催しました。平城遷都1300年祭を記念した東京での講演会は今年の5月に続き2回目です。今回は「古代はいま－奈文研最前線－」をテーマに、奈良文化財研究所の各部局長5名とゲスト講演者1名がそれぞれの切り口で研究を紹介するという構成でした。

午前10時20分に開演、会場は500名余りの来場者で埋まりました。

所長（田辺 征夫）の挨拶の後、都城発掘調査部長（深澤 芳樹）が「くれないはうつろうのものぞ」と題し、古代の製法で染色した紅色の布を壇上で広げながら講演し、次に企画調整部長（難波 洋三）は銅鐸のレプリカを手に「銅鐸－花器として生きる」を、埋蔵文化財センター長（松井 章）は「古代人の肉食の忌避という虚構」を、巧みな話術で講演しました。

午後には文化遺産部長（小野 健吉）が「日本庭園のはじまり」、副所長（井上 和人）が「古代遷都の真実－飛鳥宮・藤原京・平城京の謎を解き明かす」と題して講演。そして最後に特別講演として、かつて奈文研で勤務し、現在は東京大学教授の佐藤信氏に「古代史研究と奈良文化財研究所」という演題で、奈文研が果たしてきた役割や今後期待される在り方などについて熱く語っていただきました。

長時間にわたる講演会であったにもかかわらず、客席は午前・午後を通してほぼ満席で、東京の人々の奈良に対する関心の高さを確認することができました。

この好機を逃さず、今後も県外での広報企画を続けていきたいと思います。

（研究支援推進部 永井 あつ子）



红色の布を手に講演する深澤部長

『図説 平城京事典』の出版

本年は平城京遷都1300年を記念する年として多くの記念事業がおこなわれました。当研究所もこの年にあわせて『図説 平城京事典』を出版しました。

本書の特徴は考古学・歴史学を中心とした平城京研究の最新成果を紹介したところにあります。また、必要な項目のみを調べる事典としてだけではなく、平城京の歴史が理解できる読み物として構成しました。

内容は4部構成になっています。冒頭には「平城京へのアプローチ」として平城京の全体像をつかんでもらう概説を設けました。第2部「平城京の世界」では、「造る」、「まつりごと」、「生産と流通」、「暮らす」、「祈る」、「東アジアのなかの平城京」という章に分け、最新の研究成果を紹介します。第3部「平城京の未来へ向けて」は、平城京の研究史、そして現代にいたる遺跡の保存と整備をテーマとしました。最後の「平城京の研究法」では、発掘した遺跡や遺物からどのようにして情報を引き出すのか、その方法を解説します。巻末には詳細な文献目録、年表、索引などを用意しました。

本書の出版を契機に、より多くの方々が平城京に関心を持ち、国の文化遺産として永く保存活用されることを願う次第です。

奈良文化財研究所編『図説 平城京事典』 株式会社
2010年 15,750円 (都域発掘調査部 今井 規樹)



平城宮跡周辺の古文書調査

歴史研究室では現在、平城宮跡周辺の自治会・水利組合・旧家等に伝来した古記録を調査しています。さすがは歴史ある地域、興味深い史料をお持ちです。

たとえば下の写真は、明治9年(1876)作成絵図の、東区大極殿・朝堂院の部分です。黄色い水田の中に点々と、茶色の土壇が見えます。これらが建物基壇の痕跡で、上部中央には第二次大極殿跡と、その上に接して大極殿後殿が描かれています。下方の左右には、朝堂十二堂の土壇が累々と並んでいます。また水色の水路・赤色の道路を見ると、朝堂院の区画が綺麗に浮かび上がります。平城宮は、都でなくなった後に区画整理を全く受けず、宮殿の跡がそのまま田畠に変わっていましたことがよく分かります。

また江戸時代の帳簿からは、当時の小字地名も分かります。「大黒でん」(第二次大極殿)・「大宮」(第一次大極殿)、「内裏宮」など、平城宮由来の地名が多く出てきます。

今、平城宮跡の景観は変化しつつあります。しかし地元には元来、古代の記憶が色濃く伝わっています。その記憶を掘り起こして後世に残そうと、現在調査に努めています。(文化遺産部 吉川聰)



明治9年佐紀村絵図(部分) 佐紀町水利組合所蔵

平成22年度 飛鳥資料館 冬期企画展のご紹介

発掘調査速報展

「飛鳥の考古学2010」

2011年1月28日（金）～2月27日（日）

飛鳥資料館では、今年度も冬期企画展として、毎年恒例となっております「飛鳥の考古学」展を、明日香村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所とともに開催いたします。この展覧会は、飛鳥地域における最新の発掘成果を広く紹介することを目的として2006年度より始まり、今年で5年目となります。

今回は、石垣の全容が明らかとなった甘樺丘東麓遺跡をはじめ、内郭北西隅において正殿級の大型の掘立柱建物の存在が確認された飛鳥京跡、「日本書紀」に登場する「飛鳥寺西觀」との関連がうかがわれる遺構群が検出された飛鳥寺西方遺跡など、平成21年度を代表する発掘調査の成果を、最新の出土遺物とともに展示いたします。

また、国営飛鳥歴史公園の整備事業にともない、

継続して発掘調査がおこなわれている榆隈寺周辺の調査成果についても紹介いたします。

飛鳥の歴史はまだまだ不明なことが多いですが、長年の調査によって徐々に明らかになりつつあります。発掘調査によって得られた知見や出土遺物を通じ、飛鳥の新たな魅力を、ぜひご堪能ください。
(飛鳥資料館 丹羽 崇史)



飛鳥地域出土の土器・土製品

■ お知らせ

平城宮跡資料館 冬期企画展

2010年11月26日（金）～2011年1月16日（日）

「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」

飛鳥資料館 冬期企画展

2011年1月28日（金）～2月27日（日）

「飛鳥の考古学 2010」

平城宮跡資料館 春期企画展

2011年2月19日（土）～5月8日（日）（予定）

「発掘速報展2009・2010」（仮称）

■ 記録

埋蔵文化財担当者専門研修

○三次元計測課程

2010年9月27日～10月1日

18名

○保存科学 I（無機質遺物）課程

2010年10月6日～15日

12名

○保存科学 II（有機質遺物）課程

2010年10月18日～26日

5名

○遺跡地図情報課程

2010年11月16日～19日

5名

○自然科学的年代決定法課程

2010年11月29日～12月3日

5名

○報告書作成課程

2010年12月9日～17日

26名

現地見学会

○飛鳥藤原第165次発掘調査（水落遺跡第10次）

2010年12月5日

1,420名

公開講演会（第107回）

2010年11月13日

於：平城宮跡資料館講堂

206名

平城宮跡資料館 秋期特別展

2010年9月25日～11月7日

「天平びとの声をきく

－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて－」

飛鳥資料館 秋期特別展示

2010年10月16日～11月28日

「木簡黎明－飛鳥に集ういにしえの文字－」

■ 最近の本－所員の著作から

○井上 和人 粟野 隆『平城京ロマン 過去・現在・未来』
京阪奈情報教育出版㈱ 2010年10月

○諫早 直人『海を渡った騎馬文化 馬具からみた古代東北アジア』風響社 2010年11月

■ 最近の本－奈文研出版物から

○『図説 平城京事典』

格風舎 2010年12月

○『官衙と門』（報告編・資料編）

クバプロ 2010年12月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2010年12月